

# 剪淞吟社史稿 その五

入 谷 仙 介

初期の剪淞吟社（以下剪社と略す）の社員で、明治期に死んだのは、木幡黄雨、井川雙岳、三島睡雨、西川潜齋（没年順）の四人である。

## 一

木幡黄雨は「島根の百傑」<sup>(1)</sup>に伝を収める。島根県立図書館の淵源を成す、私立松江図書館の創立者として知られる。幼名礼之助、のち孝良、十三代久右衛門を襲名した。山城国木幡の出で、慶長の頃意宇（現八束）郡宍道に土着し、土地の有力者となり、松江藩の御用宿をつとめた。その子十四代久右衛門は吹月と号し、島根新聞社長となり、文筆、尺八をよくし、戦後の島根県文化界の重鎮であった。

出雲詩綜にいう。

名は孝良、宍道の人、沢野含齋に従学、篆刻に巧なり。松江図書館

書館を創立す。明治四十二年没す。年四十三。

剪淞詩文第二編に収める、剪淞吟社姓名録一（以下姓名録と略称する）には、

松江図書館長、八束郡宍道町、明治三十六年五月入社、四十二年十一月没す。

黄雨の詩は多くない。残されたのは次の九首と聯句四である。

送淞北詞宗赴任石州次其留別詩韻<sup>(3)</sup>（淞北詞宗の石州に赴任するを送り、其の留別の詩韻に次す）

分韻得元（分韻して元を得たり）二首<sup>(4)</sup>

松江<sup>(5)</sup>（松江）

大山絶頂放伝書鳩<sup>(6)</sup>（大山の絶頂に伝書鳩を放つ）

次芳川越山枢相見似韻<sup>(7)</sup>（芳川越山枢相の似されし韻に次す）

中秋松崎水亭觀月<sup>(8)</sup>（中秋松崎水亭に月を觀る）

戊申古中秋剪淞十九集松崎水亭雅集横山耐雪有病不来電寄一詩即次韻却寄<sup>(9)</sup>（戊申古中秋、剪淞十九集、松崎水亭に雅集す。

横山耐雪病有りて来たらず。一詩を電寄す。即ち次韻して却寄す)

戊申十一月念三月米子錦公園開山陰詩人大会賦(戊申十一月念

三月、米子錦公園に山陰詩人大会を開きて賦す)

松江図書館雅集席上聯句(松江図書館雅集席上の聯句)

送黄雨居士遊朝鮮席上聯句(黄雨居士の朝鮮に遊ぶを送る席上

の聯句)

独楽窩席上聯句(独楽窩の席上の聯句)

独楽窩招飲席上聯句(独楽窩に招飲し、席上の聯句)

彼が宍道の自分の山荘を、ときどき吟社の詩会の場に提供したことは、すでに述べた。松江図書館で例会を開いたこともある。のちに剪淞が機関誌の刊行を始めると、継続して松江図書館に寄贈している。現在は全一四三編中、七〇編のみ存するが、がんらいはほとんど全部そろっていたのではないかと思われる。図書館の公共性に対する認識とともに、黄雨との旧誼も尊重されたものであるう。

大山絶頂放伝書鳩

繫得音書放太空 音書を繋ぎ得て 太空に放てば

碧雲何処逐長風 碧雲 何処ぞ 長風を遂う

飛奴不厭松江遠 飛奴は厭わず 松江の遠きを

廿里行程一瞬中 廿里の行程 一瞬の中

飛奴は唐の張九齡が、若い時に鳩を家に飼い、これに手紙を運ばせて、飛奴と名づけた故事。

詩としては、さしてすぐれた作品と言いがたいが、大山という高山の頂から、伝書鳩を放つて、遠隔地と交信するという、新しい実

験を試みる壮快さがよくあらわれている。ようやくジャーナリズムが発達して、遠隔地との敏速な交信が要求されながら、まだ無線電信は実験段階であった、明治後期の時代相が、伝書鳩に注目させた。

## 二

井川雙岳については、出雲詩綜は次のように言う。

名は精一、津和野の人、松江に住み、簸川郡長為り。明治四十三年没す。年五十六。

「姓名録」には、

前の簸川郡長、石州の人、松江市殿町に寓す。明治三十六年四月入社。四十三年一月没す。

山陰新聞四三年一月四日付には次の死亡広告が載っている。

父精一儀病氣療養不相叶本日午前一時二十分逝去致候間此段生前尋知ノ諸君ニ御報知申上候也尚来四日午後第二時出棺八束郡乃木村ニ於テ神式火葬致候(以下略)

日付は一月四日、男亮、恭、親戚総代福田介三郎、友人村上寿夫

(琴屋)、西川自省(潜斎)、毛利八弥の連名である。毛利は梁涯と号し、仁多大原郡長。書をよくし、島根師範、商業学校の書道教師となつた。なお五日付同紙に、亮名義の会葬礼の広告が載る。恭は

後恒藤姓、著名な法学者となつた(一八八八—一九六七)。

雙岳の詩は剪淞集巻一に一四首と聯句五、同巻二に二首と聯句二、

剪淞第八編付録の出雲名勝詩文に二首、第九編に一首、第一〇編に一首、第一七編に一首、第四四編に二首、出雲詩綜に一一首である。

うち名勝詩文の二首、詩綜のうち一首は、剪淞集巻一と重複、詩綜の一首は第九編と重複する。けつきよく、すべて三二首と連句五となる。

雙岳は第一回山陰詩人大会の席で、だじやれを連発し、ラツパ節を高唱して、一座を大いにわかせたという。

戊申十一月念三日米子錦公園開山陰詩人大会賦次横山耐雪韻

(戊申十一月念三日、米子錦公園に山陰詩人大会を開き賦す、横山耐雪の韻に次す)

伯芙蓉聳入双眸 伯芙蓉は聳えて 双眸に入り

倚尽江城第一楼 倚り尽す 江城 第一の楼

香熟黄花紅葉酒 香りは熟す 黄花 紅葉の酒

味肥紫蟹碧鱸秋 味は肥ゆ 紫蟹 碧鱸の秋

灯前漫舞釵光動 灯前 漫に舞えば 釵光動き

壁上新題墨气流 壁上 新に題して 墨气流る

今日熙朝多樂事 今日 熙朝 樂事多し

不妨痛飲賦豪遊 妨げず 痛飲 豪遊を賦するを

伯芙蓉は伯耆富士、大山。後半、宴席の陽気な気分がとらえられている。

次の詩も雙岳の陽気な氣風が顔を出しているようである。

古中秋松崎水亭親月用吳梅村虎邱中秋新霽韻(古中秋、松崎

水亭親月、吳梅村『虎邱の中秋新に霽る』の韻を用う)

佳会邀良夜 佳会 良夜を邀え

全忘百不平 全く百の不平を忘る

酒軍逢大敵 酒軍 大敵に逢い

詩陣出奇兵 詩陣 奇兵を出だす

雲尽天逾遠 雲尽きて 天逾かに遠く

更闌月倍清 更闌けて 月倍ます清し

誰家貪宴賞 誰が家か 宴賞を貪りて

断続送絃声 断続して 絃声を送るや

乙巳、明治三八年旧曆八月一五日、親月詩会での作。親月詩会は

剪社の重要な年中行事で、活動停止まで、ほとんど毎年欠かさずに行われていた。頷聯の奇抜さが面白い。

無題(無題)

不負謳歌聖代民 負かず 謳歌 聖代の民

百年偏愛苦吟身 百年 偏に愛す 苦吟の身

黄金有罪誤名士 黄金 罪有り 名士を誤り

白髮無情老美人 白髮 情無く 美人を老いしむ

秋入郊墟詩思爽 秋は郊墟に入りて 詩思爽かに

涼吹簾幙酒懷新 涼は簾幙に入りて 酒懷新なり

醉余從是宜閑詠 醉余 是より閑詠に宜しく

先払牀頭滿帙塵 先ず払う 牀頭 滿帙の塵

二首のうちの一。製作時期は不明。晩年、退隱後の感懐と思われる。

### 三

三島睡雨について、詩綜には次のようにいう。

名は榮、松江の人、釈天麟に詩を学ぶ。松江銀行頭取たり。明

治四十三年歿す。年五十九。

姓名録にはいふ。

松江銀行頭取、松江市魚町、明治三十六年入社。四十三年一月歿す。

四三年一月一日付山陰新聞は「三島松銀頭取逝く」と題して、死亡記事をかかげ、その中で写真入りで経歴を紹介している。それによると、松江の素封家に生まれ、本名佐次右衛門、漢字を雨森精翁、漢詩を河野天鱗に字び、明治二年松江銀行、二七年松江商工会議所の設立にあずかり、三二年、松銀頭取、同年会議所会頭となり、その他山陰貯蓄銀行頭取、松江倉庫会社社長を兼ねるなど、県下の各種銀行企業の設立、救済を手がけて、当地方の渋沢（栄一）男爵と称された。四一年山陰新聞が投票で選定した島根実業家十傑に首位で当選、四二末には藍綬褒賞を与えられた。肥満の体軀が寿命を縮めた。最後の点について、当時は国民の間に貧困による栄養不足が広がっていたから、肥満は美食を意味し、健康と富の肉体的表象とされていた。剪社の人々には肥満者が多く、琴屋、耐雪、藤脇松軒みな肥満者であった。彼らが琴屋を除いて、六〇歳以前に世を去ったのは、そのことが影響しているであろう。なお同日付の山陰新聞には「父佐次右衛門儀病氣ノ処養生不相叶昨日午後五時死去候就テハ明十二日午後六時出棺和多見西光寺ニ於テ葬儀執行仕候」との男博吉、親戚総代糸原武太郎他四名連名の広告があり、他に松江、山陰貯蓄両行の頭取死去、松江商工会議所の会頭死去の広告、及び、両銀行の頭取死亡のため一二日午後を臨時休業とするむねの広告が載っている。

嗣子博吉は佐次右衛門を襲名、松江銀行頭取を継ぎ、県会議員、市会議長となった。遺族は今も魚町の旧宅に住むが、昭和二四年の白濁大火で焼けたために旧物を留めないという。

睡雨は剪淞吟社創立以来の社員で、森槐南を招いた創立詩会にも出席している。床几山に別荘があり、山徐水緩処と称し、荘内に相宜亭を置き、詩会の会場に提供した。詩は剪淞集巻一に一六首と聯句七、巻二に二首と聯句二、剪誌第八編付録の出雲名勝詩文に二首、第一七編に一首、第四四編に二首、出雲詩綜に七首を収める。うち名勝詩文の二首と、詩綜のうち三首は剪淞集巻一と重複、一七編の一首は四四編と重複しており、差引き二四首と聯句九となる。

松江松崎水亭創剪淞吟社席上分韻得陽（松江松崎水亭に剪淞吟社を創む、席上に分韻して陽を得たり）

歩出城闌江水傍 歩して城闌を出づ 江水の傍

板橋西転到幽荘 板橋 西に転じて 幽荘に到る

詩詞無敵名為白 詩詞 敵無く 名づけて白と為し

蹊圃栽花姓是黄 蹊圃 花を栽えて 姓は是れ黄なり

遠寺鐘鳴烟宵昏 遠寺 鐘鳴り 烟宵昏

前汀鷺立浪蒼蒼 前汀 鷺立ち 浪蒼蒼

留君更想消長日 君を留め 更に想う 消長の日

侑酒優游未夕陽 酒を侑めて優游し 未だ夕陽ならず

槐南が評して「一たび脱口を経れば、陳変じて新と為る。杜詩云

『白や詩に敵無し』又云『黄四嬢の家に花は蹊に満つ』点化して意の如くならざるは無し」杜甫の詩句を借りて、槐南を李白に比し、自らを、杜甫をもてなした村の女黄四娘に比し、大詩人を歓迎

する意を示した。

松江山陰詩会次村上松村韻<sup>(23)</sup>（松江山陰詩会、村上松村の韻に

次す）

古国風煙奇蹟多	古国の風煙	奇蹟多ク
倚欄指点幾山河	欄に倚りて	指点す 幾山河
鶯花占勝逍遙地	鶯花	勝を占む 逍遙の地
鷗鷺尋盟浩蕩波	鷗鷺	盟を尋ぬ 浩蕩の波
一劍斬妖記靈境	一劍	妖を斬りて 靈境を記し
八雲呈瑞仰神歌	八雲	瑞を呈して 神歌を仰ぐ
群賢爭賦当年事	群賢	争い賦す 当年の事
笑語懽然情更和	笑語	懽然 情更に和す

第二回山陰詩人大会での作。二回大会は四二年五月八日、松崎水亭で開かれた。米子の第一回から半年ほどで開いたことになり、意気こみが察せられる。出席者は三十余名で、剪社からは琴屋、耐雪、雙岳、潜齋、中嶋秋圃が出席、渡辺秋濤、田代活処は程無く入社する。後に社員となった団野蔵六、加島洗心、渡辺春波などの顔も見える。原唱の村上松村（一八五四—一九二二）は弓浜半島上道村（今境港市）の人、小学校長、女学校長等を勤めた教育者、西伯地方の漢詩人としても知られた。米子で開かれた第一回大会で、島根の横山耐雪が原唱を出したのに対して、松江の大会では鳥取が客に廻ったので、松村の原唱となったものであろう。なお、松村は剪社には加入しなかった。原唱は次の通りである。

松江山陰詩会諸賢政和<sup>(24)</sup>（松江山陰詩会、諸賢の政和を請う）

沢国古今形勝多 沢国 古今 形勝多ク

春光共対旧山河	春光 共に対す	旧山河
桃花水暖紅如錦	桃花 水暖に	紅は錦の如く
麦穂風柔緑有波	麦穂 風柔かに	緑は波有り
蔽芾甘棠千鳥閣	蔽芾たる甘棠	千鳥の閣
氤氳神藻八雲歌	氤氳たる神藻	八雲の歌
松江此日重修禊	松江 此の日	重ねて修禊
觴咏好将追永和	觴咏 好し	将に永和を負わんとす

第五句は、出雲松平氏の善政を、「甘棠」の詩に歌われた召公の政治に比した。尾聯は王羲之の蘭亭の故事。

#### 四

西川潜齋について、出雲詩綜は次のように言う。

名は自省、松江の人、学を内村鯨香（ウツキカ）に受く。医を業とし、眼科を以て名あり。宅後に多く牡丹を植え、殿春園と称す。明治四十五年没。年五十六、著に潜齋遺稿あり。

姓名録には次のように言う。

医、松江市殿町、明治卅六年三月入社、四十五年三月没。

在松時代のラフカディオ・ハーンと交渉があり、ハーンが寓居していた富田旅館の娘のお常の眼病を憐み、名医の治療を受けさせたこと、潜齋の診察を受けさせたという話が伝わる。横山耐雪、渡辺秋濤がいずれも眼科を標榜しており、同業者としての交際があったものに違いない。

潜齋遺稿は縦一八三ミリ、横一二二ミリの小型線装本である。表

紙題字は横山耐雪で、耐雪山人の篆字の印がある。巻頭に「暢叙幽情」の村上琴屋の題字が、二丁三面に渡って記され、信太淞北の序が一丁、本文二二丁、本文末尾に「大正元年十二月十一日夜、松心詩謝に拝読す。耐雪横山大」の識語がある。奥付によると、大正二年五月廿二日印刷、同年五月廿五日発行、編纂及び発行は松江市殿町四〇五の西川敏行、末次本町二六の市岡活版所市岡乙松。市岡活版所は、耐雪の没後、剪淞詩文の編集が松江に移るとともに、雑誌の印刷を引受けた印刷所である。

淞北の序は次の通りである。

余の郷に在る日、潜齋西川君と詩社を結び、数しば其の殿春園を過ぎりて牡丹を賞す。当時の同社、盍簪唱和すること極めて盛んなり。余郷を去る後、社友相いい繼いで凋零し、三年前郷を省すれば、則ち在る者は潜齋を外にして二三人のみ。余を湖亭に觴し、故を道い、往時を追念し、相い与に嗟嘆して別る。今夏、再び郷を省すれば、潜齋も亦た道山に帰せり。人生の常無きは此くの如く、慟哭せざらんと欲するも得べからざるなり。潜齋は少小にして鱸香翁の門に入り、其の高足たり。長じて医を東都に学び、尤も眼科に精し。還りて業を松江に開き、名声藉甚なり。治を乞う者の履、常に戸外に満つ。人となり洒脱和易、暇有れば即ち吟詠して懷を遺る。其の詩、必ずしも刻苦せず、必ずしも彫琢せず。而して神清く韻秀で、自然にして妙に臻る。余毎に同社と文を讀みて、輒ち為に節を撃つなり。而して潜齋甚だしくは自ら愛惜せず、散逸半ばを過ぐ。為に惜しむべきのみ。頃ほい、社友横山耐雪、遺詩を輯めて以て後に伝えんことを謀る。椳撫搜羅して古今

体如千首を得、釐めて一集と為し、諸を手民に付し、遠く余に序を属す。嗟乎、余は天涯に流徙して且に十年ならんとす。毎に故國を憶い、旧友を懐い、存没の感、一たび懐に根触すれば、輒ち於邑して日を累ね、自ら已む能わず。沉んや親厚すること潜齋の如きものをや。則ち常に力を竭して之を不朽にする所以を謀る。然る後にして始めて平生に負かずと為す。耐雪已に輯詩の事に任じ、拮据して勞多し。余豈に独り不敏を以て序して之を言うの役を辞すべけんや。乃ち数語を題して之に還す。

大正紀元壬子（元年）十月、淞北信太英子俊甫、柳城の古渡の小寓に撰す。

柳城は名古屋の別名。

潜齋の詩は、剪淞集巻一に二九首と聯句八、巻二に七首と聯句四、剪詩第九編付録の出雲名勝詩文に一首、第一七編に一首、第四四編に二首、出雲詩綜に一〇首、遺稿に一三一首である。詩綜のうち二首は剪淞集巻一と重複する。遺稿以外の詩で、遺稿に含まれているのが三五首ある。差引き総計一四四首と聯句一二である。

## 五

潜齋は四四年一〇月七日、境町（現境港市）の錦水楼で開かれた、第四回山陰大詩会まで出席している。第三回は欠席しているから、計三回の大会に出席したことになる。

第三回大会は四四年五月二八日に、安来の清水寺で開かれた。四三年には開かれず、四四年に二回開かれたのである。翌年剪社に加

盟する並河適処が世話役になり、因伯雲隱の詩人二人が集まり、水戸の綿引東海、備前の瀬野旭東の二人が、旅行の途中、来賓格で出席した。原唱は村上琴屋、剪社からは横山耐雪、井上井蛙が出席している。

第四回大会に、潜斎は、たまたま公用で松江に出張していた村上琴屋と誘い合わせて、同じ汽車で境まで出かけ、車中、聯句を楽しんだ。世話役は加島洗心、剪社からは井上井蛙が出席、横山耐雪は上京していて、出席できなかった。会を追って低調になってきたことがうかがわれる。

境金水楼山陰大詩会席上作<sup>(3)</sup>（境金水楼山陰大詩会席上の作）

海門潮落送漁歌 海門 潮落ちて 漁歌を送り

風露蕭々滴緑裳 風露 蕭々 緑裳に滴る

一棹流光三十里 一棹 流光 三十里

蔚藍之水月明多 蔚藍の水 月明多し

この日は旧暦八月一六日、いわゆるいざよいの月の夜である。原唱は村上琴屋の七絶三首。

東京の永阪石埭からは開会を祝う書簡が届き、詩を寄せる旨が記されていたが、当日には間に合わず、郵便で翌日に届いた。

辛亥古中秋後一日開山陰大詩会于左海錦水楼幹事加島村上両

君折簡見招余以事未能赴因用老杜十六夜翫月韻賦此書感<sup>(3)</sup>  
（辛亥古中秋後の一日、山陰大詩会を左海<sup>さかい</sup>の錦水楼に開く。

幹事加島村上両君、簡を折りて招かる。余事を以て未だ赴く能わず。因りて老杜の十六夜翫月の韻を用いて、此に賦して感を書す）

美人賒万里 美人 賒<sup>はる</sup>かに万里

明月過中秋 明月 中秋を過ぐ

天下論詩社 天下 詩社を論じて

山陰占上流 山陰 上流を占む

今年還負約 今年 還<sup>ま</sup>た約に負き

故事易牽愁 故事 愁いを牽き易し

遙想琴江興 遙かに想う 琴江の興

応同謝渚舟 応に謝渚の舟を同じうすべし

大会では、次回は石埭を招いて伯州鶴湖（東郷池）で開くことが決定される。

## 六

これより先のことになるが、四三年の中秋に、潜斎が作った次の詩は、明治末年の剪社の気分をよく示しているようである。

中秋所感<sup>(3)</sup>（中秋所感）

曾遊憶得相宜亭 曾遊 憶い得たり 相宜亭

淒雨愁雲掩竹扁 淒雨 愁雲 竹扁を掩う

不似今年今夜月 似ず 今年 今夜の月

一天如水桂花馨 一天 水の如く 桂花馨る

この詩には次の序文がついている。

去年の中秋、剪淞吟社諸君と<sup>とも</sup>に、月を三島睡雨の別業に観る。未だ某年ならずして、黃雨、睡雨、双岳相<sup>マツ</sup>い<sup>ツ</sup>踵<sup>つ</sup>ぎて即世す。其の他の吟社諸友も、多く他邦に官遊す。松江には唯だ活処、井蛙あ

るのみ。悵悵して禁ぜず。依りて此の作有り。

「他邦に官遊す」とあるが、この時期に生存している社員の状況としては信太淞北が三八年一月に石見に転任し、以後、各地を転々として、松江には帰らなかつた。渡部桃蹊は四〇年五月、浜田高等女学校校長として、村上琴屋は四三年四月、隠岐島司として、それぞれ赴任し、引続きその職にあつた。井川收軒は四三年の秋に東京に転居している。けつきよく松江周辺に残つていたのは、潜斎、活処、井蛙の三人のほかにも中島秋圃をふくめた開業医ばかりである。なぜ秋圃をあげなかつたのかはわからない。潜斎は殿町、活処は茶町、井蛙は法吉、秋圃は佐陀で、やや遠かつたためかもしれない。もつとも、秋圃は一回、二回の大会には出席しているが、三回、四回は欠席である。活処もその点と同様であるが、他の詩会への出席も、このころ秋圃は少く、やや不熱心な印象も受ける。

活処は、先の潜斎の詩に次韻しており、両者が、家が近かつただけでなく、ことのほか親密であつたことがうかがわれる。

床几山頭月照亭 床几山頭 月 亭を照らし  
 憶曾敲句夜開扇 憶う 曾て句を敲きて 夜扇を開きしを  
 秋風今夜空垂涙 秋風 今夜 空しく涙を垂る  
 一卷詩編贖墨馨 一卷の詩編 贖墨馨る

明治の末期、剪社は有力同人が相い次いで松江を去り、あるいは死没し、解散に追いこまれかねない危機的状況に達していた。何らかの打開策が計られねばならなかつた。

注(1) 一九六八年一〇月、島根県教育委員会刊行。木幡久右衛門の項目の筆者は三島四郎。

(2) 「分韻得元」詩の自注に「拙鐫の石印一枚を(信太淞北に) 饒す。文に白く「努力加餐」と」

(3) 剪淞集巻一

(4) 同上、前作と同時の作。

(5) 剪誌第八編付録、出雲名勝詩文。

(6) 出雲詩綜。

(7) 同上。

(8) 同上。

(9) 剪誌第一七編付録、鴻泥詩録。

(10) 剪誌第四四編付録、山陰唱和集。出雲詩綜。後者は「第一回山陰大詩会即事(第一回山陰大詩会即事)」に作る。

(11) 剪淞集巻一。

(12) 同上。

(13) 同上。

(14) 同上。

(15) 製作年代不明。黄雨は家に伝書鳩を養い、松江図書館と自宅との連絡に用いていた。山陰新聞明治三七年六月一日付。

(16) 大原俊二「山陰詩人群像」(日本海新聞連載) ⑨⑩(一九八三。なお大原氏が翌年の松江の第二回大会を待たずに病いに倒れたとするのは誤りで、雙岳は第二回大会には出席。)

(17) 剪淞第四四編付録、山陰唱和集。



- (18) 剪淞集巻一。
- (19) 出雲詩綜。
- (20) 剪淞集巻一。
- (21) 杜甫「春日憶李白（春日李白を憶う）」
- (22) 杜甫「江畔独步尋花絶句（江畔に独り歩して花を尋ぬ、絶句）」
- (23) 剪詩第四四編付録、山陰唱和集。
- (24) 山陰新聞、明治四二年五月一〇日付記事。
- (25) 剪誌第四四編付録、山陰唱和集。
- (26) 命日は六月二八日。松陽新報明治四五年六月三〇日付に死亡広告、男敏行。親戚長谷川乙之助ら三名、友人惣代村上琴屋ら二名。姓名録が三月とするのは誤り。
- (27) 「西田千太郎日記」明治二三年二月一〇日。
- (28) 山陰新聞明治二三年一月一八日付記事「ヘルヌ氏に関する雑話」
- (29) 随鷗集第八四編。村上琴屋の送稿。
- (30) 随鷗集第八〇編。横山耐雪の送稿。
- (31) 随鷗集第八四編。村上琴屋の送稿。原三首の第一首。出雲詩綜にも收める。随鷗集では「辛亥中秋後一日開山陰詩会於伯州左海錦水樓賦得三絶乃希吟壇諸賢高和并請晒政（辛亥中秋後の日、山陰詩会を伯州左海の錦水樓に開き、賦して三絶を得、乃ち吟壇諸賢の高和を希い、并びに晒政を乞う）」という琴屋の原唱を掲げたあとに、唱和として並べられている。題は詩綜によった。本文にも異同があり、随鷗集によった。詩綜は承句、緑が短、転句、流光三十里が只宜潮銀漢、結局、蔚藍之水が流光千里。
- (32) 随鷗集第八四編。
- (33) 剪淞集巻二。潜斎遺稿にも收める。